



中高生が認知症サポーターとして地域に貢献するためには何ができるか

敷井, 稜真

(Citation)

課題研究優秀論文集, 2020:57-69

(Issue Date)

2021-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012903>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012903>



中高生が認知症サポーターとして
地域に貢献するためには何ができるか

What Junior High and High School Students Can Contribute Their
Community as Dementia Supporter

数井稜真
Ryoma Kazui

Abstract

In 2025, it is said that one in five people over the age of sixty-five will have dementia in Japan, namely dementia is becoming the Japanese national disease. It is spread the view that it is important that we support the community in order to lead a full life for person with dementia. The author focused on dementia supporter, which is not functioning well. The purpose of study is to reveal how junior high and high school students can contribute their community as dementia supporter, and what kind of the system we need to realize this in Kobe city. The author got the qualification of dementia supporter, collected information about the lecture of it, and looked up the literature of advanced cases, also interviewed the four persons involved. The study disclosed problems such as the schedule, update lessons. The author analyzed the system about this, which consider revising and adding in Kobe city on the basis of advanced cases and interviews. The study concludes students can contribute their community to encourage their family to detect and treat earlier. Furthermore, the author suggests that Kobe city is needed the introducing the system which is the lecture about dementia in their school.

Keywords: Dementia, Dementia supporter, junior high and high school students, Kobe city, Early detection and treatment

第1章 はじめに

我が国では高齢化が進み、いわゆる団塊の世代が75歳以上となる2025年には、65歳以上の5人に1人が認知症となるほか、これと同じくらいの人数が認知症の予備群である軽度認知障害(MCI)として、少なくとも3分の1以上が数年以内に認知症に移行すると見込まれている。

認知症はまさに超高齢社会の新たな国民病であり、生涯罹患率は約55%、孫から見て両親と4人の祖父母の誰か1人が認知症になる確率は99%を超えることとなる。

従って我々、中高生も認知症のことをよく知り、認知症の人と一緒に地域で住めるようにするための活動は大切だと考えた。

第2章 背景

認知症の患者は世界に約5000万人、日本国内に約500万人いるとされる。高齢者の増加に伴い、今後さらに認知症は増える見込みで、2025年には国内の患者数は700万人に膨らむと予想されている。その7割を占めるアルツハイマー病は、脳の中に「アミロイドβ(Aβ)」というたんぱく質が蓄積し、神経細胞が徐々に壊れることなどが、原因と考えられている。現在、アルツハイマー病の治療に使われているのは、神経伝達物質の分解を妨げることによって神経伝達を維持させ、症状の改善を狙う薬である。国内では2011年までにアリセプトなど4種が承認されている。*1しかしこれらの薬によって、症状の一時的な改善は得られるが、疾患自体の進行を止めることはできないため、根本的に治す薬を世界が渴望している。根本治療薬とは、Aβの蓄積を防いだり除去したりして進行を抑えるものである。ここ20年

来、莫大な資金を費やして、研究者や製薬企業が研究開発にしのぎを削ってきたが、イーライリリー(米国)、ファイザー(米国)、メルク(ドイツ)、アストラゼネカ(英国)など世界の名だたるビッグファーマも結果を出せずに相次いで治験の中止を発表した。このような状況を受けて、近年は、根治できない認知症は根治を目指すのではなく、進行を遅らせたり、充実した暮らしができるように地域で支えたりすることが大事であるという考えが浸透しはじめた。*2

厚生労働省は認知症の人が地域で長く生活できるようにするために2013年にオレンジプランを、さらに2018年には新オレンジプランを打ち出した。新オレンジプランの7つの柱

治験の最終段階で中止が公表された
主な根本治療薬

薬剤名	中止の時期	製薬企業
ソラネズマブ	2016年	イーライリリー
クレネズマブ	19年	ロシュ
アデュカヌマブ		エーザイ
CNP520		ノバルティス

日本で承認されている認知症の薬

商品名	承認時期	作用
アリセプト	1999年	神経の働きを 活発にさせる ことで症状 の改善を狙う
レミニール	2011年	
イクセロン パッチ (リバスタッチ) パッチ		
メモリー		

図1: 2019年8月29日(木)朝日新聞 *1

は、以下のとおりだ。*3

<新オレンジプラン7つの柱>

- ①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進
- ②認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供
- ③若年性認知症施策の強化
- ④認知症の人の介護者への支援
- ⑤認知症を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
- ⑥認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進
- ⑦認知症の人やその家族の視点の重視

*3

この中の「①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」を実現するための具体的な策として認知症サポーター制度が作られた。認知症サポーターとは、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けをする人のことである。

認知症サポーターに期待される具体的な事項は以下の5点である。

- ①認知症に対して正しく理解し、偏見をもたない。
- ②認知症の人や家族に対して温かい目で見守る。
- ③近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践する。
- ④地域でできることを探し、相互扶助・協力・連携、ネットワークをつくる。
- ⑤まちづくりを担う地域のリーダーとして活躍する。

*4

認知症サポーター養成講座は、地域や職域団体等で、住民講座、ミニ学習会として開催している。参加者は、主として地域住民、金融機関や商店の従業員、小、中、高等学校の生徒などである。令和元年12月31日現在、認知症サポーターは12,344,701人(*5)いて、そのうち10代以下は2,963,222人(*6)で全体の人数の20%を超えている。商店や金融機関の従業員、駅員、警察官などについては、地域生活の中で認知症の人と接する場面が多く、認知症の人が買い物や銀行でのお金の出し入れ、駅での切符の購入で戸惑ったり失敗したりする際に、あるいは道に迷ったりする際に支援すると予想される。

認知症サポーター養成講座の講師役の人をキャラバン・メイトと呼ぶ。

キャラバン・メイトは、次のいずれかの要件を満たす者で、年間10回程度を目安に(最低実施数3回)、「認知症サポーター養成講座」の講師を原則としてボランティアの立場で行える者

- (1) 認知症介護指導者養成研修修了者
- (2) 認知症介護実践リーダー研修(認知症介護実務者研修専門課程)修了者
- (3) 介護相談員
- (4) 公益社団法人認知症の人と家族の会会員

(5) その他認知症に関する基本的な知識や介護経験等があり、キャラバン・メイトの業務を適切に実施できると認められる者

(行政職員、地域包括支援センター職員、介護従事者、医療従事者、民生委員・児童委員等)

*13

第3章 基礎情報

第1節 認知症の種類*7

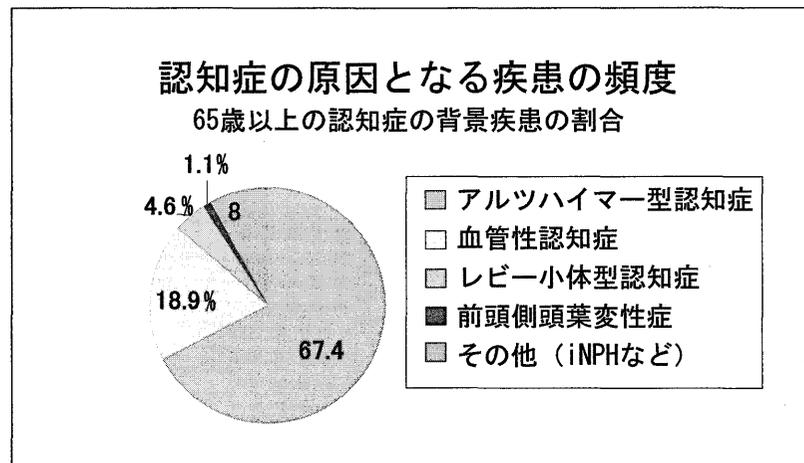


図2：朝田 18-20 厚労科研報告書 2009 より

①アルツハイマー型認知症

脳に出来る老人斑と神経原繊維変化、神経細胞の脱落が原因と考えられている。

最初は記憶障害から始まり、徐々に見当識障害や言語障害などの症状が出現する。

②血管性認知症

脳血管の破綻によって認知症に発展する。血管の破綻部位によって症状の程度や程度は異なり、破綻した箇所が脳のどの部分に当たるのかによって症状が異なる。記憶力の低下があっても判断力や理解力が維持されている場合もある。

③レビー小体型認知症

神経細胞の内部で異常な蛋白質が円形状の構造になったものがレビー小体であり、脳幹と大脳皮質に多く出現する事によって発症する。症状は徐々に進行するが、視覚認知障害、視覚構成障害が強く出現する可能性があり、幻覚や妄想も多くみられる。また、パーキンソン症候群が目立つ事もある。

④前頭側頭葉変性症

言葉の通り前頭葉と側頭葉の脳の異常であり、脳が萎縮していくことによって認知症の症状が見られるようになる。性格や感情の変化、行動の変化があり、初期症状としては家の中を歩きだしたり、机の上をたたきだしたり、足をバタバタさせたりといった常同行動と自発の減退がある。罹患率はアルツハイマー型の10～15分の1程度と低くなっている。

⑤特発性正常圧水頭症 (iNPH)

iNPHは治療可能な認知症の一つで、日本では、高齢者の約1.1%に存在することが明らかになった。この頻度はこれまでに、私たちが考えていたよりも多い頻度で、これまで多くの患者さんが見逃されていた可能性がある。「認知症は治らない」という過去の常識を改め、「結構頻度が多い治る認知症がある」ことを認識する必要がある。ただし、治る認知症でも治療の時期が遅れると回復することが難しい場合がある。

第2節 認知症の方を支える取り組み

①オレンジカフェ

オレンジカフェとは認知症の人やその家族をはじめ認知症に関心のある人が集まり、情報交換や交流をする中で認知症と向き合うための場である。目的としては、「認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場」を提供することである。*8

②認知症ちえのわ net

認知症ちえのわ net は、認知症のケアに悩みを抱えている人同士でケアに関する情報を共有するためのコミュニティサイトである。認知症の患者さんをケアする人に、実際に行ったケアの方法とそのケアが「うまくいった」か「うまくいかなかった」という情報を投稿してもらい、それぞれのケアの方法の成功率を計算することも目的の一つである。本サイトは、日本医療研究開発機構 (AMED) の認知症研究開発事業として、大阪大学大学院医学系研究科精神医学分野の先生達が中心となり運営している。ケアする人達と認知症の専門家の知恵を合わせながら、一緒に認知症に関する理解を深め、日ごろの認知症ケアに役立つ情報を発信している。このサイトは認知症の患者さんと家族が困っている悩みを解決できる方法の一つと考えられる。*9

第4章 目的

中高生が認知症サポーターとして地域に貢献するためには何が必要かを調べ、まとめる。そして、神戸市にはどのような仕組みが必要であるか他の地域を参考にしながら、検討し提言する。

第5章 研究手法

第1節 神戸市認知症サポーター養成講座の文献調査、基礎情報の収集

2018年6月神戸市広報誌にて認知症サポーター養成講座が開催されることを知り、フェイスにて応募した。認知症サポーター養成講座担当窓口は社会福祉法人神戸市社会福祉協議会福祉部福祉事業課の南氏であった。

神戸市のホームページにて「認知症サポーター養成講座のご案内」*11を事前に閲覧し基本情報の収集を行った。

第2節 認知症サポーター養成講座受講

2018年8月29日(水)10:30-12:00に東灘区役所4階大会議場で行われた。内容・受講者の年齢層を調査した。受講してみて感じた問題点を挙げることで認知症サポーター養成講座の改善案を考える材料とした。

第3節 FTLD(前頭側頭葉変性症)家族会に参加

2018年8月20日(月)13:00-15:00に兵庫県福祉センター2階の会議室で行われた。FTLDは認知症の原因となる疾患の一つであり、指定難病である。*10家族会に参加し、以下の4点について参加者から話を聞いた。

- ①日常生活で患者さんとそのご家族が困っていることは何か
- ②家族会で認知症サポーター一人はどれくらいいるか
- ③家族以外の認知症サポーターの人がこの会に関わることがあるのか
- ④中高生に出来ることがあるのか

第4節 前・地域包括センター勤務、現職は高知大学に設置された高知県基幹型認知症疾患医療センター医療補佐員(看護師)との面談

2019年7月29日(月)に高知大学にて、永倉和希氏に以下の質問をし、話を聞いた。

- ①認知症の方に認知症の兆候が見られてから、診察までにかかった期間
- ②認知症の診察に行こうと思うきっかけは何か
- ③認知症の可能性がある高齢者の方は誰と診察を受けに来るのか
- ④認知症の診察を受けようと思うきっかけとなる言葉を言ったのは誰か
- ⑤認知症サポーターにおいて中高生に求めること
- ⑥高齢者の方は孫や子どもに受診を勧められると、認知症の検査を受けてみようかと思えるか
- ⑦認知症サポーター養成講座の問題点

第5節 公益社団法人認知症と家族の会高知支部会員との面談

2019年7月30日(火)に高知市内家族会事務所にて、森澤陽子氏にも上記同様の質問

をし、話を聞いた。

第6節 高知県須崎市地域包括支援センターの担当職員との面談

2019年11月19日(火)滝川氏に高知県須崎市で中高生がどのように地域に貢献しているか以下の質問をし、話を聞いた。

- ①高知県須崎市でのこれまでの中高生サポーター養成実績
- ②須崎市の中高生が認知症サポーター養成講座を受講後地域の老人施設を訪れる制度をどのように思っているのか
- ③須崎市ではなぜ認知症サポーターの活動が活発であるのか
- ④須崎市のように中高生が地域のご老人と触れ合う機会が設けられている他の地域はあるのか
- ⑤中高生が認知症サポーター養成講座を受講後地域の老人施設を訪れる制度の課題点

第7節 中高生の認知症サポーターの活動が活発な事例の文献調査

公益社団法人認知症と家族の会高知支部会員である森澤氏より、2019年11月28日着郵便にて認知症サポーター育成ステップアップ講座用テキストより抜粋した資料を受け取った。*12

2019年11月30日にインターネットを用いて、「認知症サポーター」、「高校生」のキーワードで検索を行った。

第6章 結果

第1節 神戸市認知症サポーター養成講座の文献調査、基礎情報の収集

神戸市では市民1人1人が身近な問題として認知症を理解し、認知症になっても安全に安心して暮らし続けることができる「認知症の人にやさしいまち」を目指し、認知症サポーター養成講座を開いている。認知症サポーター養成講座は認知症がどのような病気で、認知症の方にはどう接するのがよいのか、誰でも学ぶことができる。地域の方に認知症を理解していただくため、講師が直接地域に向向って認知症のお話しをする形となっている。認知症サポーター養成講座の所要時間は60～90分で受講者にはオレンジリングが配布される。

<講座の内容>

- 認知症とは
- 認知症の方への接し方
- 認知症サポーターとは
- 認知症の相談窓口

認知症サポーター養成講座は誰でも受講することができるが、以下の条件がある。

- おおむね10～40人のグループで申し込むこと
- 派遣料は無料、会場は申込者が用意すること
- 派遣調整が必要なため、1～2ヶ月程度の余裕を持って申し込むこと

以下は神戸市のホームページに記載されている2020年度の2月の1ヶ月間の認知症サポーター養成講座の開催日時である。

【日時】令和2年2月7日(金曜日)14時00分～15時30分(13時30分より受付)

【場所】神戸市勤労会館 4階 405

(神戸市中央区雲井通5丁目1-2)

【定員】30名

【応募締切】令和2年1月31日(金曜日)

【日時】令和2年2月18日(火曜日)18時00分～19時30分(17時30分より受付)

【場所】神戸市勤労会館 4階 403

(神戸市中央区雲井通5丁目1-2)

【定員】30名

【応募締切】令和2年2月10日(月曜日)

*11

第2節 認知症サポーター養成講座受講

私は、2018年8月29日(水)の10:30-12:00に東灘区役所4階大会議場で行われた認知症サポーター養成講座を受講した。参加者55人、内訳は女性が44人、男性が11人だった。20代以下は私1人であった。次に若かったのは30代女性1人、4、50代は2、3人で、その他の人は60代以上の高齢者であった。

講師はキャラバン・メイトである生活協同組合コープこうべの丹内恵美氏であった。

<講義の内容>

- 日本の将来の人口推移
- 介護認定
- 認知症とは
- 認知症に対する偏見がある
- 認知症の脳の状態
- 脳の構造と役割
- 認知症の疾患別割合
- 認知症の原因となる病気
- 治る認知症 正常圧水頭症
- 認知症の中核症状と行動・心理症状
- 認知症の予防

知的・社会活動に参加することが大切であり、人と話し笑うことで脳の血流が良くなる。
全く話さず笑わない人は良く話し笑う人に比べて、約8倍も認知症の罹患率が上がる。

◎認知症である人への接し方

—症状を悪化させる対応法—

言い聞かせる、閉じ込める、急がせる、無視する、からかう、軽蔑する、環境を変える、叱る、自尊心を傷つけるなど

—症状を改善させる対応法—

認知症の種類とその疾患の特徴・程度を知る

- ・生活習慣・生活史・環境・性格などを知って対応する
- ・身体状況、薬の影響、環境に注意を払う
- ・ゆっくりペースを合わせる
- ・楽しく明るい気分、笑顔で礼節を持って接する
- ・視線を合わせ、穏やかな口調ではっきりと話す
- ・質問は短い文章で、「はい」か「いいえ」で答えられる質問にする。
- ・説得しないで納得してもらう
 - ・点で支えてくれる人をたくさん持つ(配達員やヘルパーなど、日常的に認知症の患者さんと会う機会が多い人)

◎「一緒に考えましょう」という実践形式の研修

自分がもし認知症になったとき、どのように接してもらいたいのか、どのような気持ちになるかを考えてポストイットに書いて、参加者全体で共有する。その後それらに対して講師の方がコメントするという学びだった。

設定:あなたは物忘れがひどくなり、病院で受診したところ、アルツハイマー型認知症と診断されました。以下の問いに答えなさい。

- ①自分はどうのような行動を起こしたいと考えますか。
 - ・家族と時間を過ごしたい
 - ・セカンドオピニオンに行く
 - ・有効な治療法を探す
 - ・病気のことについて知りたい
- ②周りの人にどのような行動をとってほしいですか。
 - ・いつも通り接してほしい
 - ・理解してほしい、知らないふりをしてほしい
 - ・否定せず、受け入れてほしい
 - ・おかしいこと、危ないこと、間違っていること、自分が何か忘れてあったら教えてほしい
 - ・見守って、サポートしてほしい

◎その他

中高生は個人で受講する人はほとんどなく、学校単位で受けることが多い。1クラスは高齢者体験、もう1クラスはキャラバン・メイトの方による認知症サポーター養成講座受講というように、入れ替わる時間割になる。中には毎年受講する熱心な学校もあり、この学年のこの時期に受けることと決まっている。しかし、それはまだ一部の学校であり、もっと中高生という早い時期から知識を持ってもらうというのはとても重要なことである。(神戸市社会福祉協議会の久我氏談)

第3節 FTLD(前頭側頭葉変性症) 家族会に参加

FTLDには言語障害が強く出るタイプと行動障害が強く出るタイプとがある。今回私が参加した家族会では、言語障害が強く出るタイプの患者さんのご家族と行動障害が強く出るタイプの患者さんのご家族それぞれ10人程度ずつに分かれて、近況報告をしていた。私は行動障害の患者さんのご家族のグループに参加した。近況報告の内容としては、患者さんにある症状が出てしまったときにある方法で接してあげると、患者さんの症状が改善したとか悪化したなどというものだった。それに対してグループの中で他の人がその時にこういう方法で接してあげるともっと患者さんの症状が改善したと体験談を話っていた。このように知識を共有する場ともなっていた。

以下家族、ご本人からのお話

- ①日常生活で患者さんとそのご家族が困っていること
 - ・近所の花をちぎる。
 - ・スーパーで自分が欲しいもの見つけて鞆に入れたり、そこで食べたりを繰り返して懲役刑を受けた。診断書を持って行っても刑罰の重さは変わらなかった。
 - ・胃ろう(口から食事のとれない方や、食べてもむせ込んで肺炎などを起こしやすい方に、直接胃に栄養を入れる栄養投与の方法)をつけるべきかどうか悩んでいる。(→必要以上に補給されてしまった栄養・水分は、胃から食道に逆流して、誤嚥性肺炎を併発してしまうのではないか)
 - ・旅行に行くべきかどうか判断が難しい。(→環境の変化による患者さんの負担と日常とは異なる患者さんの喜びをどのように判断するべきか)
- ②認知症サポーターの方が家族会の人の中に何人いるか

認知症サポーターのことは知っている。受講したいと思っているが、病気の家族の介護をするのが精一杯で受講する時間がない。
- ③家族以外の認知症サポーターの人がこの会に関わることはあるかない。
- ④中高生に出来ること

実の孫が認知症患者さんに接することで認知症患者さんの問題行動（暴力、徘徊、妄想）が軽減できたので家族に認知症患者さんがいる孫はより頻回に関わってほしい。また、認知症についてよく知ってほしい。

⑤その他

FTLDの患者の数は少ないが、症状が物忘れだけでなく、思い出の場所に行く徘徊や言葉を忘れてしまう言語障害があり、なかなか周りには理解されない苦しみがある。認知症の家族会は多いが、FTLDに特化したものは少ないため同じ境遇の家族会があることで心身共に助けられている。

第4節 前・地域包括センター勤務、現職は高知大学に設置された高知県基幹型認知症疾患医療センター医療補佐員（看護師）との面談

以下永倉和希氏談

①認知症の方に認知症の兆候が見られてから、診察までかかった期間はどれくらいか
1週間で受診する人もいれば、数ヶ月経ってから受診する人もいて人それぞれである。地域包括支援センターに保健師として勤めていたときの事例からは、認知症の兆候が見られてから受診するまでの流れの種類は以下の二つに分けられる。

I・同居しているか、同居していなくても頻りに連絡を取り合う家族がいる人は、
独居していても、家族が窓口相談して受診する

II・家族と連絡取り合わずに独居している方は、地域民生・警察の方が相談して受診する

IよりIIの高齢者の方が、「ドブの中に入って靴を探している」、「おむつを洗って干している」、「便を部屋にまき散らしている」などのBPSD(行動・心理症状)の症状が著明に出ていることが多かった。認知症の方に受診させるように促すためには認知症の方の人生観・価値観・アイデンティティを理解することに時間をかけることが大切である。IIの高齢者の場合、認知症の方に「警察から認知症の疑いがあると聞いたので病院を受診してください。」ではなく、「この辺の家を回っているのですが、困ったことはありませんか。」と話しかけるのが最適である。他にも認知症の方自身が病院を受診を拒否して、衣食住で大きな問題が無い場合は病院受診をせず、見守った事例もあったようだ。その時には行政の方・近所の方に気にかけてもらっておくよう伝えておく事が大切である。つまり本人発信で物事を進めることが重要である。

②認知症の診察にいきこうと思ったきっかけは何か

薬の飲み忘れや離れて暮らしている息子や娘が両親と電話で話しているときに同じ話を繰り返されたり、話がかみ合わなかったりすることに違和感を覚えることで受診してみてもどうか提案して、受診に繋がる。認知症に対する意識が高く受診しに

来た人は比較的軽度の認知症であり、それに対して家族や周りの人に言われての受診で拒否的な態度の人は重度の認知症である傾向があった。

③認知症の可能性のある高齢者の方は誰と診察を受けに行ったか

息子や娘が近くで暮らしているときは息子や娘であり、息子や娘が遠くに暮らしていても、あまり接する機会がない場合は地域の保健師が多い。

④診察を受けようと思ったきっかけの言葉を行ったのは誰か

孫や息子や娘である。

⑤認知症サポーターにおいて中高生に求めること

災害時に認知症サポーターである中高生が認知症の方の役に立てること、認知症サポーターを受講して知識を持つことで、不安が募っている両親・祖父母にその知識を教えて病院を受診を勧め、認知症ではないことを確認して安心させることや認知症サポーターとして地域の老人施設へ赴き、貢献することが挙げられる。高知県須崎市では中高生は認知症サポーター養成講座を受講すると、須崎市の老人施設に一回行くことが義務付けられている。これは須崎市が認知症に対しての活動が活発であり、地域と行政が綿密に連携しているために可能である。しかし中高生には積極的にボランティアをすることを望んでいるわけではなく、町中で偶然居合わせた時の対応を身につけておくべきだとの考えに基づいている。

⑥孫や子どもに受診を勧められると、認知症の検査をうけてみようかと思えるか

孫に勧められると、受診してみようかという気持ちになる。

⑦認知症サポーター養成講座の問題点

具体的な疾患別の認知症の対応の仕方の知識などのもう一歩踏み込んだ知識が欲しい。

第5節 公益社団法人認知症と家族の会高知支部の会員との面談

以下森澤陽子氏（元看護師であるが、母が認知症であるため家族として家族会に入会）談

①認知症の方に認知症の兆候が見られてから、診察までかかった期間はどれくらいか
初期症状は気づきにくいので以前は発症から1年以上経って、気づくことが多かったが、最近は認知症の情報が得やすく、約半数は3~6ヶ月で受診につながっている。

②認知症の診察に行こうと思ったきっかけはなにか

物忘れ・探し物が増えて、物盗られ妄想につながる、買い物で同じ物を買うなど家族や周りの人が変だと気づき受診してはどうかと提案された。しかし、最近は本人が不安になって受診するケースが増えた。

③認知症の可能性のある高齢者の方は誰と診察を受けに行ったか

配偶者、娘、息子、姉妹、兄弟などである。

④診察を受けようと思ったきっかけの言葉を言ったのは誰か

家族の方が「健康診断の同じ種類で一定の年齢でみんな受診している」と声をかけたり、かかりつけ医から検査だと言って勧めてもらったりする。

⑤認知症サポーターにおいて中高生に求めること、できることはなにか

サポーター養成講座受講をきっかけに、正しい認知症への理解と知識を身につけ、将来認知症の方やその後家族と関わるようなことがあれば、適切な対応をして欲しい。例えばカーテンが閉まったままの家、新聞受けに新聞があふれている家があると、最寄りの地域包括センターに連絡することや様子がおかしい人、具合が悪そうな人への声かけ・支援・地域包括支援センターへの連絡や救急通報など、地域での見守り力も確実なものになっている。すなわち中高生は発見したことを大人に伝えたり、自分の地域の包括センターの場所・人の連絡方法を知っておいたりすることが必要である。

⑥孫や子どもに受診を勧められると、認知症の検査をうけてみようかと思えるか

認知症にかかる前からの関係性によって変わるので日々の言葉がけが大切である。

第6節 高知県須崎市地域包括支援センターの担当職員との面談

以下滝沢氏談

①高知県須崎市でのこれまでの中高生サポーター養成実績

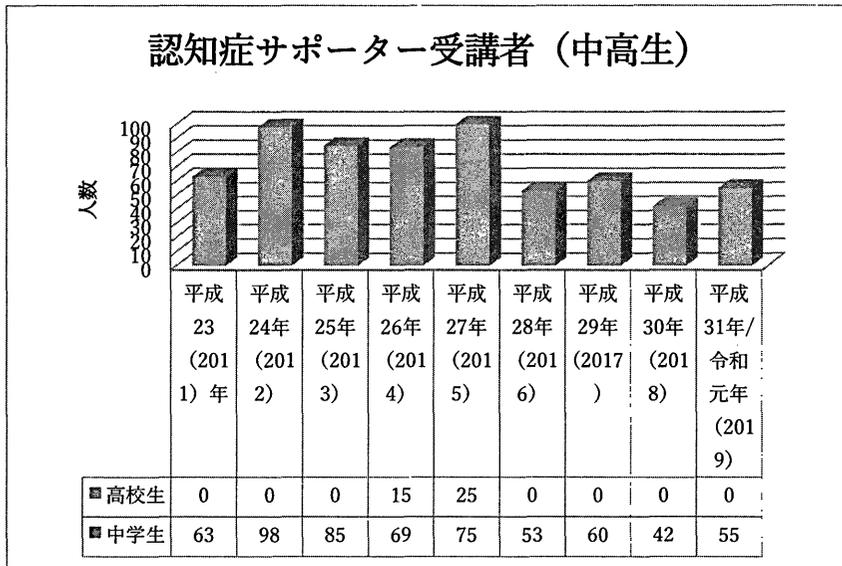


図3：滝川氏より提供

※平成24年…中学校3校、平成25年…中学校3校、平成26年…中学校2校、高校1校、平成27年…中学校2校、高校1校、その他の年度は中学校2校
市内にある中学校は公立5校、私立1校、高校は公立1校（平成30年度まで2校）、私立1校

②須崎市の中高生が認知症サポーター養成講座を受講後地域の老人施設を訪れる制度をどのように思っているのか

受講後に中学生では「関わり方が大事だとわかった」「病気のことが知れて良かった」、高校生では「困った人と思わず一人の人として向き合いたい」などの感想と「もっと知りたい」「予防について知りたい」という要望がある。中学校で行ったサポーター養成講座に参加し、福祉施設に行き高齢者と交流した生徒の声では、「福祉を学ぶなかで目の不自由な人、耳が聞こえにくい人、しゃべりにくい人などがいた。その中で、視線を合わせて大きな声で話している職員さんの姿を見て僕も職員さんのように話しかけてみたいと思った。意識して職員さんのように話しかけてみた。〇〇荘(伏せ字)では互いに話し合い、助け合い協力する大切さを学べた。何事にもコミュニケーションが大切であると感じることもできた。これからの会話などでは、恥ずかしがらず勇気を出してみようと思えてきた。困っている人がいたら、まず自分から声を掛けていける、そんな人になっていきたい。」があった。

③須崎市ではなぜ認知症サポーターの活動が活発であるのか

十分なデータの分析等ができていないため、主観的な分析だが、小学校での福祉体験授業の影響も大きいのではないかと。須崎市地域包括支援センターの母体である社会福祉協議会が以前より市内の小学校を中心に、福祉体験授業の出前講座に出向いている。手袋やアイマスク、車椅子等の活用により高齢者の疑似体験をするのが主な内容だ。認知症サポーター養成講座同様、全ての小学校で均一に行っているわけではなく、各小学校の福祉活動の授業枠の中で複数あるプログラム（盲導犬と触れ合う等をされている学校もあり、年度により小学校でも認知症についての勉強会や高学年向けにサポーター養成講座を実施している）のうち依頼があれば出向している状況だが、いくつかの小学校では毎年定例化している。

これにより、一部地域ではあるが、小学校では福祉体験授業で高齢者等の体験→中学校に進学し、認知症サポーター養成講座→福祉体験授業（数人ずつで須崎市市内の介護保険事業所や障害の事業所等に出向き体験をする）、という一連の流れができていく。ここ8年程毎年依頼がある中学校2校も、福祉体験授業の事前学習としている。

④須崎市のように中高生が地域のご老人と触れ合う機会が設けられている他の地域はあるのか

他の地域で、どのような取り組みが行われているのか、十分な把握が出来ていない。それぞれであろうかと思う。須崎市では、授業外でも少人数で、近隣の保育園や小学校と近隣のデイサービスやグループホームが交流をするなどされている。ただし以前に比べると、3世代、4世代同居の家庭が減っているというのが支援者らの実感だ。

- ⑤ 中高生が認知症サポーター養成講座を受講後地域の老人施設を訪れる制度の課題
養成後の活動は決して活発とはいえず、あくまで職域や日常生活内での見守り声掛けサポートなどに留まっており、課題であると考えている。地道でも啓発活動を続けることが、災害時に避難所での助け合いなどにもつながる。

第7節 中高生の認知症サポーターの活動が活発な事例の文献調査*12

① 秋田県羽後町

羽後町では住民キャラバン・メイトと認知症サポーター自主運営による拠点とメイト・サポーター協会メンバー同士の連携の組織を立ち上げ、多彩な活動を行っている。羽後町の全小中学校で実施している認知症サポーター養成講座で活躍する高校生キャラバン・メイトも活動に加わり、認知症の人や家族、子ども～高齢者まで参加する世代間交流を行い、支え合いのまちづくりを進めている。そして、キャラバン・メイトと住民の熱意が一体となって成果を上げている

- ・平成21年羽後高校では教諭がキャラバン・メイトになり、顧問をしているボランティア部の生徒に対して認知症サポーター養成講座を実施する。認知症サポーターになった高校生は包括支援センターの依頼で小学生向けの認知症サポーター養成講座を手伝うことになり、オリジナルの紙芝居を作って上演し、それ以来小中生向けの講座への協力が継続的になる。そこで日本初の高校生メイトが誕生した。平成22年度より町のメイト研修を部員全員が受講し、研修のグループワークでは高校生らしい活動アイデアに一般の受講者も刺激を受けている。
- ・これまで町にある6つの小学校は5、6年生合同で2年おきに、3つの中学校では全学年合同で3年おきにサポーター養成講座を開催していた。現在学校が統合され、今後は未定だが、統合になっていない羽後明成小学校は毎年6年生のPTA 授業参観で親子がサポーター養成講座を受講している。
- ・住民キャラバン・メイトが認知症についての説明を行い、その説明がどれくらい分かったかを確認する意味も含め高校生メイトが紙芝居を行う。高校生メイトは授業時間帯に講座に出向くため、1回の講座に2人ずつ参加する。
- ・高校生キャラバン・メイトはサポーター養成講座で子どもと関わる中で自信をつけ、学外の活動にも積極的に参加するようになる。生け花を地域の人に教えてもらい、病院や福祉施設に配達に行き飾る、メイト・サポーター協会のイベントに参加するなど、地域の輪

のでの活動が増える。活動の中で自己肯定感や自信を持ち、コミュニケーション能力や企画力や実行力を身につけていく。進路に福祉関係を選ぶ生徒も多い。ボランティア部があるからと、羽後高校を志望する生徒も現れるほどになった。

② 滋賀県長浜市

滋賀県長浜市では平成22～24年度の3年間で市内41の全小・中学校での認知症サポーター養成講座を実施した。学んだことをたくさんの人に伝えたいとキッズ・サポーター達の活動が広がっている。

- ・小学校6年生児童20人が認知症サポーター養成講座を受けた後、担任の「これ、聞いただけで終わっていいのかなあ」という一言に、子ども達は翌月の授業参観日に保護者を対象に認知症の知識を伝える70分の授業を実施した。授業内容は以下の通りである。

- ・高齢者を理解するための紙芝居
- ・認知症という病気についての説明、認知症高齢者への対応の良い例・悪い例の寸劇
- ・認知症に関するクイズ
- ・親子と一緒に話し合うグループワーク

これら全て子ども達の手によって進められた。

保護者からはその日の授業に対して「認知症について初めて知ることもあり、正しく理解できた」「症状に合わせた対応の重要性が分かった」等の感想が寄せられた。子ども達は「学んだ事を人に伝える大切さ」を経験し、意義深いものになった。

- ・サポーター講座を受講した日に学んだことをすぐ実践したこどもがいた。その女子小学生が帰宅すると、まさに祖母と母が「ご飯を食べていない」「もう作ってあげた」と会話しているところだった。小学生は「お母さんちょっと見ときや」と言い「おばあちゃん、お母さんこれからごはん作らるで、私と一緒におやつ食べて待つてようか」と対応した。祖母が「ほうか、作ってくれはるのか。じゃあ待つてようか」と言うのを聞いて、冷蔵庫から自分のおやつのプリンを出し「これ食べて待つてな、私お茶もつてくわ」というと「そりやすまんなあ」と祖母は言った。母親は「子どもからこんなこと教わるなんて」と驚いて担任に電話で伝えてきた。

③ 千葉県佐倉市

佐倉市では中学生メイトが初めて誕生し、夏休みに活躍した。大人から「こうしてほしい」と伝えるよりも「ぼくたちはこういうことをしていけばいいんじゃないか」と言う中学生メイトが自らの言葉で語り、伝える講座はキッズ・サポーター講座の一つのあり方として参考になる。

- ・平成24年3月、小学6年の女子と中学1年の男子各1名が千葉県主催のキャラバン・メイト養成研修を受講。二人の親は市内の介護施設で働いており、認知症サポーター養成講座に興味を持ち、サポーター養成講座の手伝いをする経験をしてメイト研修を受講した。学校長の理解により出席扱いで平日のキャラバン・メイト養成研修に参加した。

- ・平成 24 年夏、女子が中学 1 年、男子が中学 2 年になると、学校の夏休みに学童保育所に通う小学生(1 年～6 年)へのサポーター講座を開催し、メイトとして活動を始める。パワーポイントの資料は標準教材を参考に、自分で考えて準備、小学生にわかりやすい言葉に置き換えて説明した。
- ・平成 25 年の夏休み中学 3 年の男子中学生は市が企画した子ども向けのサポーター講座で小学生の部(80 名)、中学生(17 名)の 2 講座で講師役を務めた。認知症の基礎知識、認知症サポーターの役割について、小中高生と保護者の前で講義した。

④高知県香美市

介護に関わる家族の日頃の想いや認知症によくある行動心理症状(BPSD)について詠んだ句が書かれ、高校生が挿絵を添えた。楽しく遊びながら認知症に対する知識が学べる。

「認知症よりそいかるた」の読み札の例

- ・あ あんた誰 聞かれるたびに 自己紹介
- ・い 今食べた ばかりですよ 朝ごはん
- ・う うそじゃない 確かに見えてる 感じてる
- ・ぬ 盗まれた その不安に よりそいを
- ・ふ ふとん濡れ 孫がやったと 即答す
- ・ら 乱暴な 言葉の裏に ある不安
- ・ろ 朗々と 語るは幼き 日々のこと



第 7 章 考察

認知症は世界に約 5000 万人、日本国内に約 500 万人患者がいる頻度の多い疾患である。認知症のほとんどは、根治ができず、根本的治療薬の開発のめども立っていない。このような状況を受けて、日本においては、国民の認知症への理解を深め、地域でともに生活できるようにするために認知症サポーター制度が作られた。この制度の中では、認知症サポーター養成講座を受講した認知症サポーターが認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けをすることが期待されている。ここでは、以下の 5 つの点について考察する。

第 1 節 神戸市の認知症サポーター養成講座のまとめ

私は、この研究をするために、最初に、神戸市の認知症サポーター養成講座について調べ、また実際に 2018 年 8 月 29 日(水)の 10:30-12:00 に東灘区役所 4 階大会議場で開催された認知症サポーター養成講座に参加した。実際に参加する前に調べた結果からは、平日の午前中に神戸市勤労会館や区役所で認知症サポーター養成講座が開催され、参加したい人が応募するのが一般的であることがわかった。また 10~40 名のグループで認知症サポーター養

成講座の開催を希望して、講師を派遣してもらう方法もあることがわかった。講座の内容は、「認知症とは」、「認知症の方への接し方」、「認知症サポーターとは」とのみ記載されていた。

実際に、認知症サポーター養成講座に参加すると、講義の内容はとても充実していた。特に私が興味を持った内容は「認知症に対する偏見がある」、「治る認知症 正常圧水頭症」、「認知症の中核症状と行動・心理症状」、「認知症の予防」であった。これまで認知症の人に対して多くの人が偏見を持っていることを知らなかった。また治る認知症があることも知らなかった。さらに認知症の症状には物忘れなどの中核症状だけでなく、怒りっぽくなるなどの行動・心理症状があり、これが認知症に関わる人を悩ませる症状であることもこの講座で初めて知った。そして、認知症の人への接し方に多くの時間がさかれており、言い聞かせる、閉じ込める、急がせる、無視する、からかう、軽蔑する、環境を変える、叱る、自尊心を傷つけるなどは症状を悪化させる対応法で、ゆっくりペースを合わせ、楽しく明るい気分、笑顔で礼節を持って接する、視線を合わせ、穏やかな口調ではっきりと話す、質問は短い文章で、「はい」か「いいえ」で答えられる質問にする、説得しないで納得してもらう、点で支えてくれる人をたくさん持つは症状を改善させる対応法であると知ることができた。また認知症の予防には、笑うことが大切であることも知った。

講義の仕方もとても工夫されており、講義を聴くだけでなく、「皆と一緒に考える」という実践的な研修の時間もあった。私も、「認知症になったらどのように接してもらいたいのか」をこの時初めて考え、また参加している人の考えを聞いた。認知症の人は、これまで普通にできていた日常生活が、脳の病気のために徐々にできなくなってしまう。これはとても辛く、恐怖感を感じる状態だと思った。このような恐怖感を少しでも軽くするように接するために、認知症の人の立場になって、どのように対応するかを考えることが重要だと実感できた。

私が参加したサポーター養成講座の参加者は 55 人であったが、そのうち 60 歳以上が 50 人で、20 代以下は私 1 人であった。また話を聞いた神戸市社会福祉協議会の久我氏も、個人で受講する中高生はほとんどおらず、学校単位で受けることが多いとのことであった。しかし学校単位で受ける学校も一部のみとのことで、中高生のサポーターが非常に少ないことがわかった。認知症サポーター養成講座は中高生でもわかりやすく、興味を持てる内容であったため、多くの中高生が受講して欲しいと思った。

第 2 節 先進地域の中高生による認知症サポーター活動のまとめ

日本の中では、中高生が認知症サポーターとして活発に活動をしている地域があった。これらの地域での活動は、神戸市も含めた多くの地域で、中高生がこの活動に参加する方法を考える上で役立つと思われた。

高知県須崎市では、小学校で福祉体験授業が始まり、その一環として高齢者体験を行う。中学校では認知症サポーター養成講座を受講し、その後、介護保険事業所や障害の事

業所等に出向き体験をするという一連の流れが構築されている。中高生が認知症サポーターとなった後の体験実習の仕組みが作れている点が素晴らしい。

秋田県羽後町の羽後高校では教諭がキャラバン・メイトになり、顧問をしているボランティア部の生徒に対して認知症サポーター養成講座を実施した。認知症サポーターになった高校生は包括支援センターの依頼で小学生向けのサポーター養成講座を手伝うことになり、これが継続的な活動になり、さらに日本初の高校生キャラバン・メイトが誕生した。高校生キャラバン・メイトはサポーター養成講座で子どもと関わる中で自信をつけ、学外の活動、例えば、生け花を地域の人に教えてもらい病院や福祉施設に飾る、メイト・サポーター協会のイベントなどに積極的に参加するという好循環も生まれた。また学生は、活動の中で自己肯定感を持てるようになり、コミュニケーション能力や企画力や実行力も身につけた。羽後町全体としても、6つの小学校は5、6年生合同で2年おきに、3つの中学校では全学年合同で3年おきにサポーター養成講座を開催している。中高生の認知症サポーターが増えたことで、小学校という早い時期から認知症について考える機会を町全体で設けることができている。

滋賀県長浜市では、小学校6年生児童20人が認知症サポーター養成講座を受けた翌月の授業参観日に、保護者を対象にした認知症の知識を伝える授業を実施した。さらにここで学んだ知識を小学生がすぐに自分の祖母に実践して、うまく対応できた。その場面を見て、母親は子供から教わったと実感した。

千葉県佐倉市では、小学6年と中学1年がキャラバン・メイトとなった。このことから、この地域では小学生でも認知症のキャラバン・メイトができることと認識されている。

高知県香美市では、認知症よりそいカルタを作り、楽しく遊びながら認知症の知識が学べるようにした。

以上の全ての先進地域で共通しているわけではないが、重要なことは、小学生への働きかけ、自らがキャラバン・メイトになるなどの中高生の自主的な活動、中高生と学校、教師、地域の包括支援センターや認知症サポーター養成講座の職員との協同だと思われる。また最初は学校単位や教師による認知症サポーター養成講座がきっかけになっている。これは中高生が認知症サポーター養成講座を自然に知ることは難しいことによると思われる。また自主的な活動には、小学生への認知症サポーター養成講座、知識をわかりやすく教えるための紙芝居やよりそいカルタなどの作成も含まれる。さらに須崎市と長浜市の例から、認知症サポーター養成講座を受けた後、その知識を使える場があることも大切だと思った。

第3節 認知症サポーター養成講座の問題点と改善策の提案

第1節でまとめたように、神戸市の認知症サポーター養成講座について調べ、また実際に参加した結果、講座の内容は充実しており、研修も工夫されていたが、改善が望まれる点も

感じた。ここでは、第2節でまとめた先進地域とも比較しながら、神戸市の認知症サポーター養成講座の改善策を提案する。まず、3つの改善が望まれる点があると思われた。

- 1, 開催日程について：講座開催日程は3ヶ月毎のスケジュールしか決まっておらず、年間スケジュールがないため予定が立てにくい。夏休み中の実施は2回のみ。8月～10月までは平日のみ開催のため学生や仕事人は受講しにくい。
- 2, 広報の仕方について：神戸市認知症サポーターの広告方法が充分でない。神戸市のホームページや広報誌以外で知る方法はない。
- 3, 継続的な講座について：認知症サポーター養成講座は1回のみ。継続して新たな認知症の知識を得る機会がない。

開催日程については、一般市民から参加者を募り行う認知症サポーター養成講座は、神戸市勤労会館や区役所の一室を借りて行うので平日の昼しか開催できないだろう。

しかし中高生が、認知症サポーター養成講座に参加するためには、学校単位で開催される方が有効だと思う。先進地域での例を見ても、学校での養成講座がきっかけとなっている。しかし先進地域は小さな町が多く、神戸市のような大きな都市では、学校単位で養成講座を開催することは、キャラバン・メイトの人数の点で難しいと思う。また神戸市のような都会では、娯楽、文化、教育などが地域よりも充実しているため、色々な時間の使い方ができる。だから自分事の学業や部活、遊びに時間を使って、認知症サポーター養成講座に時間を使おうと思う人が少ないかもしれない。また地方よりも都会の方が、高齢化は進んでいないので、神戸市では認知症が地方よりは身近なことでは無いため、認知症の活動に興味を持つ人が少ないようにも思う。

認知症サポーター養成講座は内容や日程、広告の仕方が十分でないため、認知度が低い。私もそうだったが、興味があってインターネットで検索して見つけた。それまではよく知らなかった。神戸市の色々なイベントなどで広報することが大切だと思った。

認知症サポーター養成講座を受けた後の、継続的な講座は必要だと思う。認知症サポーター養成講座を受けると受講の証としてオレンジリングがもらえるにもかかわらず、オレンジリングをつけている人をあまり見かけない。オレンジリングを持っているのになぜ着けないのか。それは私もそうだが、自信がないからだと思う。一回のみ認知症サポーター養成講座を受講しても自分は求められている役割を果たせるのか、オレンジリングをつける資格があるのかと不安だからだと思う。継続して学習する機会、実習する機会があれば、自信をもって前向きに関われる人が増えると思う。多くの人がオレンジリングをつけられるようにしたい。神戸市には学校の長期休み中に養成講座を開催し、実践の場として老人ホームや認知症カフェでボランティア活動ができるようなシステムを導入することを提案する。このような継続活動によって、認知症サポーターの制度自体を神戸市民が知るきっかけとなると思う。そのため確実に受講率は上がる。また身近な社会とつながることで視野が広が

り、将来つく職業選択や進学にむけて考えるきっかけになるので、特に中高生にとっては貴重な社会勉強の機会になる。

神戸市では、認知症サポーターの講師役である認知症キャラバン・メイトに小中高生はなれない。しかし、意欲・興味があり、講師として必要な知識が十分に備わっている小中高生ならば、認知症キャラバン・メイトになることができるように制度を変えることを提案する。次の第4節でまとめるが、中高生ならではのキャラバン・メイトが誕生すると思う。

第4節 中高生認知症サポーターの役割

今回、FTLDの家族会の人達、高知県基幹型認知症疾患医療センター医療補佐員（看護師）の永倉氏、公益社団法人認知症と家族の会高知支部会員の森澤氏、須崎市地域包括支援センターの担当職員滝沢氏と面談したが、全ての人が、中高生に認知症サポーター養成講座を受けて、認知症と接し方を知ってもらい、認知症ケアに関わって欲しいと望んでいた。特に家族に認知症の人がいるのであれば、より頻回に関わることで認知症の本人が安心し、介護する家族の負担が軽減されると言われていた。例えば、認知症サポーター養成講座を受けた後に、祖父母が電話で同じ話を繰り返し話したり、話がかみ合わなかったりすることで認知症を疑い、両親に病院の受診を勧めることができた話を聞いた。また認知症の可能性があっても本人は、なかなか受診してくれないが、孫が受診を勧めると受診するとの話は何度も聞いた。また認知症の家族は認知症の人の「ドブの中に入って靴を探している」、「おむつを洗って干している」、「便を部屋にまき散らしている」などの行動・心理症状（BPSD）にとっても困っているが、実の孫が認知症の本人に接することで症状が軽減できたとの話も聞いた。BPSDの治療法や解決策を中高生が考えることは難しいと思うが、認知症の家族がどのようなことで困っているかを医療者やケアの専門家に伝えることだけでも大切だと思う。さらに災害時には、避難所などで認知症の可能性のある人に適切に接することも期待されていた。私はこのようなことで、中高生も役に立てることを多くの中高生に発信したいと思った。孫から見て両親と4人の祖父母の誰か1人が認知症になる確率は99%を超えるとのことなので、今は家族に認知症の人がいない中高生も、これから先、家族の誰かが認知症になる可能性があるので、全ての中高生が認知症サポーター養成講座を受けて欲しいと思った。

FTLD 家族会に参加した時に、認知症サポーターの方が家族会の人の中にどれくらいいるかを調査したところ、私が参加した行動障害を持つ患者の家族で認知症サポーターは12人中0人だった。忙しくて認知症サポーター養成講座を受けられないというのが理由であった。家族が認知症になる前に自分が認知症サポーターになっていれば、認知症になった家族に対してもうすこし余裕を持って、上手く対応が出来たかもしれないという声があった。就職したり、家庭を持ったりすると認知症サポーター養成講座を受ける時間がなくなると思う。だから学生のうちに認知症サポーター養成講座を受ける方がよいと思った。

また中高生が認知症サポーター養成講座を受講し、そこで得た知識を両親や祖父母に伝えることもいいと思った。なぜなら、祖父母が認知症になったら、介護するのは認知症でない祖父母のどちらかが、親世代だからである。彼らが認知症サポーター養成講座を受講していればよいが多忙のため受講する時間がない。孫世代である中高生が認知症に詳しくなっておき、認知症のことや接し方など学んだことを親や祖父母に教えることで家族内の介護がうまくできると思う。また中高生が認知症に関心を持つ姿を大人に見せることによって、より多くの大人が認知症を正しく理解し皆が助け合える社会の実現につながることも思った。

先進地域では行われていたが、中高生が認知症キャラバン・メイトになるのもいいと思う。認知症サポーター養成講座を受講したからと言って、すぐに認知症の高齢者と関わり直接的に助けるのではないし、受講した知識で認知症の人に自信を持ってうまく接することができるわけでもない。そのために、さらに勉強したいと思った。その目標として認知症キャラバン・メイトになりたいと思った。そして自分より小さい小学生などの認知症サポーター養成講座の講師役を務めたいと思った。日常の学習でも言えることであるが、人に教えることでより深く勉強し、知識が定着する。中高生が小学生に教えることで認知症について理解を深められると思う。そうした後に、病院や福祉施設に赴き、認知症の高齢者の方を助けたいと思っている。最近では独居の高齢者が増えているので、独居の認知症の人も増えてくると思う。近所に独居の認知症の人がいたら驚かずに、うまく接したいと思った。このような中高生から認知症の人への支援は、一方向性の支援のものではなく、お互いに助けあう双方向性のものがよいと思った。先進地域で知ったが、認知症の高齢者の人が高校生に助けてもらうが、逆に高校生は普段教えてもらえない生け花などを認知症の人に教えてもらったりする。このような関係こそが長続きすると思った。中高生はSNSなどが得意なので、同じように認知症サポーターや、全国でキャラバン・メイトになった中高生が増えれば、距離を超えてSNSなどでつながり、協調して活動することも考えられると思った。

第5節 若年性認知症の人に対する中高生認知症サポーターの役割

今回、私は特に若年性認知症の方の家族会に参加したいと思っていた。それは若年性認知症の方の子供は私たち中高生と同年代であるからである。また若年性認知症の人はついこの間まで、仕事をしていたので高齢者向けのサービスが合わなかったり、経済的な問題が生じたりしているということも知ったからである。そのため認知症の家族会とは別に、若年性認知症の当事者・家族を対象にした会が兵庫県内に16カ所、うち神戸市には1カ所あるそうだ。兵庫県社会福祉協議会のひょうご若年性認知症支援センターが窓口となり専門の相談員による相談、勉強会本人や家族が孤立しないよう家族会の支援などを行っている。

前頭側頭葉変性症 (FTLD) は、若年性認知症の代表的な原因疾患である。FTLD は、アルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症のような治療薬が存在しないため、適切な接し方で対応しなくてはならない。FTLD の特徴的な症状は行動・心理症状 (BPSD) で、人格変化や我が道を行く行動、したいことはするが、したくないことはしないという身勝手な行動である。逆に FTLD は、アルツハイマー型認知症のような強い記憶障害がないため一般の人には認知症だと思ってもらえない。近所の花をちぎる、スーパーで自分が欲しいもの見つけて鞆に入れたり、そこで食べたりを繰り返すので単に迷惑な人、犯罪者のように扱われてしまう傾向にある。実際に懲役刑を受けた人、診断書を持って行っても刑罰の重さは変わらなかった等の事例もあるようだ。そのため家族の精神的、金銭的負担も他の認知症の家族よりも重い。症状が独特なため、FTLD 家族会が認知症家族会とは別にあるのだと思われる。

認知症サポーター養成講座では、FTLD という病気があるという説明はあったが、認知症の原因疾患別の症状の特徴や対処法の違いについての詳しい講義はなかった。周りからの理解が得られないことが家族の悩みの最大の原因だと考えられるため、認知症サポーター養成講座でもっと詳しく FTLD の特徴的な症状、対応のしかたについて講義して欲しいと思った。友人の両親のどちらかが FTLD であれば、私たち中高生こそが、病気のことを知り、その友人を支えたいと思ったからである。

第 8 章 結論

私は中高生が認知症サポーターとして地域に貢献するために何ができるかという問いに対して今回の調査研究を通して考え回答した。また神戸市でどのようなことができるかについても考えた。中高生が認知症サポーターになることは多くの人が望んでいた。そして身近なことから始めることが大切であった。それは認知症サポーター養成講座で得た情報をまずは自分の祖父母に対して認知症を疑うことと受診を勧めることに活かす。また祖父母が認知症であったら忙しい両親に認知症のことや接し方を伝え、祖父母のケアに活かしてもらおう。さらには近隣に住んでいる高齢者が認知症であったら、偏見なく接する。また神戸市で認知症サポーター養成講座をより多く、また多くの人が参加しやすい日程で開催していただくよう要望する。また認知症について興味を持ってさらに活動したい中高生にはキャラバン・メイトになれる機会をつくってもらいたい。中高生の認知症サポーターは SNS などでも協調しながら、より多くの中高生が認知症について興味を持ってもらえるように活動し、そして小学生などに対する養成講座を手伝うなどの機会をもらえれば、やりがいも増すと思う。若年性認知症、FTLD については、自分や友人の両親がなりうるので、より身近な病気として考えたい。私は、本研究を通して認知症に興味を持った。根本的な治療薬が開発されれば、現在の状況を変えられるとも思ったので、治療法についても今後、勉強したいと思った。

参考文献

- ・地域ケア政策ネットワーク (2016) 「認知症サポーター育成ステップアップ講座用テキスト：認知症サポーターキャラバン」 地域ケア政策ネットワーク全国キャラバン・メイト連絡協議会*12
- ・ほんとうのトコロ認知症ってなに? (2019) 山川みやえ、土岐博、佐藤真一 大阪大学出版会
- ・認知症の人の心の中はどうなっているのか? (2018) 佐藤真一 株式会社光文社
- ・家族と自分の気持ちがす〜っと軽くなる認知症のやさしい介護 (2017) 板東邦秋 株式会社ワニプラス
- ・認知症知って安心! 症状別対応ガイド (2012) 教井裕光、杉山博通、板東潮子 株式会社メディカルレビュー社
- ・認知症の人にもやさしいコミュニティーづくりハンドブック (2018) 相原洋子、前田潔 神戸市看護大学

参考 HP

- ・朝日新聞 「認知症の根本治療薬、相次ぐ開発中止 完成を阻む壁とは」*1
(<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20190828002854.html>) (参照日 2020-1-26)
- ・集中 MediCon 「『世界初認知症根治薬』に賭けるエーザイは勝てるのか」*2
(<http://www.medical-confidential.com/2019/12/05/post-10008/>) (参照日 2020-1-26)
- ・厚生労働省 「『認知症施策推進 5 か年計画(オレンジプラン)』について」*3
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh-att/2r9852000002j8ey.pdf>) (参照日 2020-1-26)
- ・厚生労働省 「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン) ~認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて~」*4
(https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.pdf) (参照日 2020-1-26)
- ・認知症サポーターキャラバン 「認知症サポーターの養成状況」*5
(<http://www.caravanmate.com/result/>) (参照日 2020-1-26)
- ・認知症サポーターキャラバン 「サポーターの性別・年代別構成」*6
(http://www.caravanmate.com/web/wp-content/uploads/2018/07/H30_6index02.pdf) (参照日 2020-1-26)
- ・和歌山県立医科大学病院認知症疾患医療センター「認知症疾患について」*7
(<http://www.wakayama-med.ac.jp/med/dementia/ninchisyou/index.html>) (参照日 2020-1-26)

- ・レオパレス 21 あずみ苑「認知症の方やそのご家族を地域で支える『認知症カフェ（オレンジカフェ）』」*8
〈<https://www.azumien.jp/contents/industry/00047.html>〉（参照日 2020-1-26）
- ・認知症ちえのわ net 「認知症とは」*9
〈<https://chienowa-net.com/>〉（参照日 2020-1-26）
- ・難病指定センター 「前頭側頭葉変性症（指定難病 1 2 7）」*10
〈<https://www.nanbyou.or.jp/entry/4841>〉（参照日 2020-1-26）
- ・神戸市 「認知症サポーター養成講座のご案内」*11
〈https://www.city.kobe.lg.jp/a46210/kurashi/registration/shinsei/20191205ninchi_hsho.html〉（参照日 2020-1-26）
- ・神戸市 「キャラバン・メイト養成研修の開催について」*13
〈https://www.city.kobe.lg.jp/a46210/kenko/fukushi/carenet/ninchisyou/20190905carravan_mate.html〉（参照日 2020-1-26）